
嘘つき世界と二人と絵本

武知美海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

嘘つき世界と二人と絵本

【Nコード】

N7514Y

【作者名】

武知美海

【あらすじ】

世界を嘘でできた絵本だと称する、妹の形見である絵本を大切にしている少年、泉。
世界の嘘は幸せであり、その幸せに隠された嘘を隠すために、人は幸せを使うのだと。

そんな泉の持論に、ひとつ書き足した傷だらけの少女。
イギリスのクォーターであり、隣に住むエリー。

不器用な少年と、積極的な少女の物語。
絵本のような嘘だらけの世界のなかで、
本当の幸せを見つける物語。

エリーのペース（前書き）

これは恋愛小説です。

時々、ギャグテイストだったり、残酷な描写があり得るかも知れませんが、そういう描写が苦手な方は、止むことをお勧めしません。

エリーのペース

僕は絵本が大好きだった。

メルヘンで、夢があつて、それでいて、いつだって僕たちを楽しませてくれた。

僕には妹がいた。

僕より二つ年下で、幼かった僕たちはいつだって二人で絵本の世界に入り込んで、そのメルヘンな世界に夢を馳せていた。

でも。

そんな幸せな世界は、呆気なく、破れ去った。

まるで、ハサミで切り取られるように。

まるで、水でふやけた藁半紙のように。

妹は、あっけなく、僕の前から消えていった。

手からこぼれ落ちる真砂のごとく、さらさらと、風に舞うように。

絵本の世界はすばらしい。

だって、嘘でできているのだから。

そんな嘘が、大好きだった僕は絵本を抱いて泣いた。

もう、可愛かった妹と絵本を読むことは叶わない。

そのときの僕にはどうして妹が死んでしまったのかなんて、分からなかった。

いや、聞かされなかったのだ。

そのときの僕はまだ六歳。

まさか、妹が【殺された】だなんて、言われても理解なんて出来ないだろうから。

けど、今は違う。あれからすでに十一年が経過して、僕は十七歳になり、ごくごく普通の高校生として生活している。

妹が実は殺されていて、犯人は捕まって今は刑務所だとも、親からは聞かされた。

僕の思い描いていたモノログでは、さぞかし犯人が憎いだろうと、感じるのかもわからないけれど、それは違う。

結局は、この世にある幸せなんてものは、全て絵本と同じなのだと、思い知らされたただけなのだから。

そう。

全ては優しく彩られた、【嘘】という絵本の世界。

そう考えれば合点がいくというものだ。

だから僕たちは有り合わせの幸せをやりくりして、今ある幸せに隠れている嘘を隠すのだ。

それはいつか破綻すると、本能的にわかっているけど、理性をもち、文明的な生活に悦を覚えた人間にはそれから逃れる術は、ない。

それは僕自信もご多分に漏れることなく、きつちりとパーツとして収まっているのだ。

だからと言ってなんだというのか。

そういわざるを得ないくらいに、この考えかたは破綻して、破綻し尽くされている。

だって、僕は妹が殺されていたと知っても、結局は有り合わせの幸せで幸福なのだから。

誰しもがそうとは思わないけれど、少なくとも、僕自身はそうなのだと、自信をもって言える。

仕方ないことだろう。

人の記憶とは薄れていくものであり、妹がいたという事実はすでに十一年前のことで、僕にとっては過去。過去とはすなわち、過ぎ去った時間。

あるいは。

なかったこと。

なぜなかったことになるのか。

なにせ、記憶は薄れるのだから、どうしたって子供の頃とは違う僕にしてみれば、妹がいて、その妹が殺されたからといって、それを憤慨するまでの記憶は持ち合わせていないのだから。

薄情な人間だと、個人でも納得に足る冷血ぶりだろう。

けど、漫画や小説なんかで見かける復讐を、当時四歳だった妹が願うのだろうか。

靈魂の存在を認めるとしても、だ。

死んだそのときに人の時間は停止するのだから、そんなこと望むだけの知識があるのか。

いや、無かったとしても、恨み辛みはあるだろうが。

けど、僕は復讐をするつもりはない。

だって、意味ないから。

犯人は捕まって服役中。

裁判だって余罪もあってか重い刑だって聞いた。

だったら、それが裁きた。

僕が介入することじゃない。

けど……ひとつだけ。

ひとつだけ、妹が僕に残してくれたものがある。

絵本だ。

嘘で構成された、メルヘンで、キレイで、すばらしい世界。

僕の大好きだった世界。

今は、やはり年が年だからなのだろうか、絵本を読もうとは思わなくなつた。

ただ一人、ある少女を除いて。

その少女は、日本人なのだけれど、異人の血を受け継いでいる銀髪の長髪を風になびかせた、長身痩躯で眉目秀麗な典型的な美少女。性格は人懐こく、感情表現はとても豊かだけれど、時々感情が暴走して泣くこともある。

そして、若干だけれど妄想癖があり、何かの拍子にスイッチが入る。名前はエリーⅡ羽犬塚Ⅱグッドマン。

僕のクラスメイトで、中学二年生の頃からのお隣さんでもある。

彼女は僕の絵本が好きだ。

よく僕に絵本の読み聞かせをせがんでくる。

そこまではまだいい。

ただ、最近では僕に絵本を【作れ】と要求してきている。

そんなむちゃくちゃなと思う。

何しろ、僕には絵心がない。

もし猫なんかを描こうものなら、牛と言われる始末だ。

ちなみに僕の描いた猫を牛だと言ったのはエリー本人だ。

「ジャックー！」

「エリー、僕はジャックじゃない。僕は日本人。山中泉って名前があるから」

ちなみにジャックとはエリーが僕につけたあだ名のようなもの。

愛称として呼ばれることすら願ひ下げの名前だ。

「ごめんごめん。だって最近、泉ったら冷たいんだもん」

頬を膨らませながら、如何にも不機嫌ですよ。と、訴えてくるエリィ。

けど、僕が彼女に冷たくする理由はあったりするが、これがまた実に情けない。

「泉が冷たいのは当たり前だよ。温かかったら温泉だ」

なんて軽口を返しながらお茶を濁そうとするのだけれど、そんなものが自由奔放な人柄に定評のあるエリィに通用するはずもなく。

「冷たいなら泳ぐし、温かいなら浸かるわよ。なんで避けるの？家では普通にしてるのに」

「エリィ、君は少し自分の容姿を意識してよ。僕は特徴のない、ただの男子。君は構内で一番と言われるほどの美人。そんなのが一緒に歩いてみなよ？どれだけ嫌な視線浴びるか分かったもんじゃない。ただでさえ家が隣ってだけで変ないちゃもんつけられてるのにさ」

つい本音を漏らしてしまう。

が、この事に僕に比はないだろう。

学校のアイドルと一緒にいって恨み買うよりは遥かに居心地がいい。僕は平穩無事が好きなのだ。

「私の容姿なんて関係ないじゃん。私は好きで泉にいるのに、泉は私というのは嫌なの？」

「そういう訳じゃないよ。ただ、僕は平穩無事が好きなんだ。君の好きな漫画みたいな、学校のアイドルと懇ろになって全校の男を敵に回すみたいな展開はごめん被りたい」

「そんなの堂々としてればいいじゃない。ビクビクしてるから変に恨み買うのよ。お隣さんで仲が良いのは当たり前なんだから」

それはまあ、そうなのだろうけれど。

都会ならいざ知らず、ここは片田舎の地方都市。

田畑はあちこちにあるし、昔ながらの家屋に施設もある。

僕の家も田畑の真ん中であって、エリーの家もその隣。

近所の世帯数もそんなものだから、必然的に仲違いになるようなことは滅多なことではなり得ない。

エリーと初めて会ったときも、普通に対応していたし。
やはり意識しすぎなのだろうか。

「それに、特徴ないとか泉は言ってるけど、泉ってイケメンだから地味に女子と一部の男子の人気高いよ？」

「一部の男子ってなに!？」

怖いことを聞いてしまった。

僕の平穩な生活が、学園ライフが破綻していく。
どうしてこんなことに。

「ところでさ、返事まだ？」

「え?...えーと、まだ、先じゃダメかな？」

ちなみにエリーの言う返事とは、僕にたいしての告白であり、エリ

「はその返事を待っているという状況である。けど、冷静に考えても見てもらいたい。僕の言ったことを思い返してほしい。」

でも、そんなことはお構いなしなのがこのエリーという女の子なのだ。

性格は面倒見がいいし、勉強だってそこそこ。スポーツは万能で、料理も得意なのだ。

ただ、無茶ぶりしたりやたらめったらな甘えたりだったりとも目立つが。

「私、本気なんだけど。私だからいいけど、あまり女の子を待たせるものじゃないわよ?」

「分かってるんだけど…。僕だって、その…エリーのこと、好きだけど。でも、やっぱりそんな簡単に決められないよ」

「はあー、わかってはいたんだけどね。毎度思うけど、どうして私、泉のこと好きなんだろ?」

それを僕に聞かれても反応に困るし、地味にダメージ受けるからね。でもその類はまた膨らみ、色は白みの肌色から桃色の指す肌へと変わった。

照れていることは歴然と言った様子で、純粹に彼女は僕のことを想ってくれている。

ふと、絵本のことを思い浮かべる。

【世界そのものは嘘で作られた絵本そのもの】という、僕の持論。これは、本当によくわからない持論だけれど、有り合わせの幸せを

補填することができるのなら、どうできるのだろう。

エリーの想いを受け入れることが、僕たちにとっての幸せなのだろうか。

それとも…それも、偽物だろうか。

「またお得意の世界は絵本の持論？」

「え？あ、ごめん。また、顔に出てた？」

「だったらそんな持論に書き足してあげる。【どうせ偽物なら、壊れるまでは本物である】ってね」

どういう意味なのだろう。

その意味を聞いてみても、エリーはただ、

「ひ・み・つ」

と、はぐらかしてしまう。

本当に自由な女の子だ。

なら、いっそ意味がわかるまでエリーに振り回されてみようと思う。

「わかった。僕の負けだよ。付き合おう、エリー」

屋根づたいの距離

エリーの告白を受け入れたのは、ついぞ昨日のこと。

そのあと歓喜の余りに泣いてしまったエリーに抱きつかれた上に、近くを通ったクラスメイトにその光景を目撃されてしまったものだから、休み明けの学校が憂鬱で仕方ない。

けれども、まあ。

悪い気分ではない。

僕だって、健全な男なのだ。

エリーのように愛らしく、気心の知れた少女に告白されて、嬉しくないわけもなく、エリーの想いが更にはどの程度のものなのかはわからないけれど、僕だって彼女のことが好きなのだ。

だから、今はとても気分がいい。

今日は土曜日で、特に進学校なんかではない高校に通う僕とエリーは休みであり、今、僕は自宅の二階にある六畳の洋室である自室にて、宿題を片付けている最中である。

恐らく彼女もそうしていることだろう。

元々僕はこのように休みの始めに宿題なんかするようなマメな性格ではないのだけれど、エリーの要望でこうすることになっている。

エリーは勉強に関してそれなりに真面目に取り組んでいて、宿題のような面倒なものを先に片付けてから予習してしまうらしい。

それからは僕の家で過ごしたりしているのだけれど、そのときに僕が宿題なんかして遊ぶ時間が減ることが嫌だと、僕にこのような要望を申し付けた。

ちなみにエリーとの交際が始まったとは言えど、僕たちのスタンスには余りに変わりはなく、と言うよりも、変わりようがない。

恐らくは手を繋いだり、一緒に出掛けたりする機会は増えるのだろうけれど、急いて関係を発展させる必要性を感じるような歳でもなく、今までのように友達のようなご近所さんといった付き合いかたになるだろう。

そんなことを考えながら宿題にいそしんでいると、いつのまにか宿題は片付いてしまい、僕はとりあえずとばかりに机を片付けて、床に放置していたゲーム雑誌を棚に戻した。それからゴミ箱の中のゴミを片付けて、簡単に掃除機をかけておいた。

どうせこれからエリーはやって来るのだから、部屋を片付けておくに越したことはない。

彼女は潔癖とも言えるほどにきれい好きで、ゴミが散らかっていたりすると、怒って一日不機嫌ということもある。

コンコン、と、窓をノックする音。

僕は窓の鍵を開けて、窓を開け放ち、一言。

「玄関があるんだから、そっちから来てよ」

「えー。こっちのが近いからいいじゃん」

エリーは屋根づたいに窓から窓へと移動して僕の部屋へと訪れる。我が家についている玄関とインターホンは来客の少ない我が家では、家人とエリーの家である羽犬塚家の人のためにあるといっても過言ではなくなっている。

エリーは窓に腰かけると穿いていたソックスを脱いで、丸めてから自分の部屋へと投げ込んだ。

他人の部屋には汚れたものを持ち込まないと決めているそうで、基本的には室内では裸足になり、帰るときに再び予備で持ってきているソックスを穿くという徹底ぶり。

だから彼女のいつも持っている鞆のなかには予備のソックスや着替えが入っている。

制服のブラウスにしたって、普通なら二、三着程度で事足りるそうなのだけれど、エリーは午前と午後で着替えるため、七着持っているそう。

本人もこの行きすぎた潔癖なところは悪癖として認識しており、今は直す努力をしているようだ。

「それから、毎回言ってるけど、どうして僕の部屋に来るときはそんなに薄着なの？露出高すぎだよ。目の毒だよ。下着とか見えてるんだから、少しは気を付けてよ」

彼女の部屋着はともラフ過ぎて、ただでさえスレンダーでスタイルがいいのに、それを惜しげもせず晒すような薄着をしている。

今日だってキャミソールとホットパンツで、長い髪をサイドアップにまとめあげているだけ。

僕は慣れてしまっただぎまぎすることはないのだけれど、普通に考えてもこれは恥ずかしいだろう。

「私、長袖とか苦手なの。前にも言ったじゃない。それに、下着と水着の区別だって曖昧な私よ？今さら過ぎ」

「水着つて、まあ、たしかに曖昧かもしれないけど。それでも責めて胸元隠すとかはしてよ。この間、従姉さんに見られて説教されたっていうのに」

「あー、それは本当にごめん。うーん…ならタートルネックにするよ。サマーセーターならノースリーブあるし」

そうしてもらえると大変、助かる。

それにさっきも言ったけれど僕だって健全な男子。

こんな挑発的とも取れる格好を見せつけられていつバカなことをしでかすかなんて、分らないのだから。

いくら慣れてしまったとはいってもだ。

そうならないとは言い切れないのだから、自重してもらいたいものだ。

「まあ、今日まで我慢して」

と、部屋の中へと入りながらそうつぶやいた。

けどまあ、今日は例の説教された従姉さんはいないから、大丈夫だろう。

母さんも父さんも、エリーのことは知ってるし。

「あー、お部屋の掃除したら疲れたー…」

「お疲れ様。僕の部屋はそんなに綺麗じゃないよ」

「泉にそんなこと求めてないわよ。私が気にしちゃわないくらいでいいの。それとも、お部屋、私が掃除していいの？」

それは勘弁願いたい。

なにせ、部屋のあちこちに隠された思春期の聖書がちらほらとあるのだから。

そんなものを見つけれでもしたら、明日の我が身に首は無し。家族会議は確定的で、更には従姉さんにも叱られてしまっただろう。

「別に泉がエッチな本持つてても怒らないけど？興味あるのが普通なんだし、無かったらホモとか疑うわよ？」

そんな慈愛に満ちた目で僕を見ないでいただきたい。
あと、発想が極端すぎる。

そういうことに興味はあるけど、そういう本とかは嫌いっていう男子はいるんだから。

「私の性格的に泉がそういうことを望んでも、たぶん無理なんだし、自分で処理して貰わないとね」

「そういうことってさらっと言うことじゃないからね…」

「相変わらず下ネタに弱いなあ。顔真っ赤じゃん」

僕は別に普通だと思うのだけれど。

エリーがやたらと下半身ネタについだけだろう。

エリーは普通と少しずれた羞恥心を持っていて、例えば、風にあおられてスカートがまくれ上がっても意にも介さないのに、髪を撫でられたりすると異様に恥ずかしがったりするのだ。

と、僕はとりあえずエリーの髪を撫でておくことにした。
うん、きれい好きのエリーらしく、しっかりと手入れの行き届いた美しい髪で、さわり心地は極上の一言につきる。

「あ、い、泉、恥ずかしいからやめて…」

と、本当に恥ずかしそうに身を屈めてしまった。

けど、止めてやるつもりはなくて、僕は私物としてエリーが置いてある櫛を取り出して、上手くはないけれど彼女の髪をすく。

エリーの顔はリンゴのように真っ赤になり、なんとも可愛らしい反応を返してくれる。

けど、ここでふと、ひとつの疑問が浮かんだ。

潔癖な人というのは、体、特に髪なんかには人が触れることを嫌がると聞いたことがあるのだけれど、どうしてエリーは嫌がらないのだろうか。

結構な頻度で僕は撫で付けていたりするのに。

「泉だからよ。他だったら…殴ってる」

「彼氏特権ってやつなの？」

「…というか、彼氏じゃなくても泉だから、許してるの。恥ずかしいのも我慢してるのよ。好きだから…触ってほしいの」

「なんというか……僕の方が恥ずかしくなってきたよ」

「私はもつと恥ずかしいの！……ねえ、今は幸せなの？」

少しだけ影を落とすような、そんな寂しそうな表情をするエリー。それは僕の感じている幸せを偽物だと、僕が思っているからなのかもしれないから。

そんな影の薄化粧を見てもなお、僕は答えを返せない。

どうしてなのだろうか。

たしかに、エリーのことが好きで、こうして一緒にいると満たされるけれど。

それでも、それは嘘つきな、絵本のような世界だからかも、と。心のどこかで感じてしまっているからなのかもしれないから。

「…私が、本当の幸せを教えてあげるから。少なくとも、私はすごく幸せだもん。この幸せが…偽物のはずがないもん。…嘘なわけ、ない」

僕へと体を翻して、ぎゅっと僕を抱き締めた。

紺碧の瞳からは涙が溢れて、僕が本気で彼女との恋愛を楽しめないことを、真剣に心配してくれた。

交際している張本人が、心配してくれるのだ。

それはとてもありがたいことで、とても幸福なことなのだろう。

「ありがとう、エリー」

僕はそっと、彼女の細い体を抱き締めた。

ガチャっ。

そんな音になり、この部屋の時間が一瞬だけ停止した。

「やつぽー、泉い…って、何してるの、あんたら」

従姉さんだった。

おかしい、たしか今日は彼氏さんとのデートで来ないはずだったはずの従姉さんが、どうしているのだろうか。

「……えーと…実は僕たち付き合ってた…」

「…ふーん。それはまあ、やっとかつて感じただけね。お姉さん、そういうのはまだ早いなって思うんだよねー。エリーちゃん、泣いてるけど、なにをしたのかな？お姉さんにちゃんと説明してほしいんだけどなー」

まずい。

顔は笑っているけれど、目が笑っていない。

ちなみに従姉さんは警察官で、性犯罪の捜査官でもあるため、こういった誤解はとにかくまずい。

誤解ではあるけれど、この抱き合っている体勢に、泣きじゃくるエリー。

うん、弁解しようにも潰されている。

「…ぐす、お姉さん、誤解。…私が、勝手に泣いただけ。私、気持ちのコントロールがへたくそだから」

エリーがフォローしてくれる。

「エリーちゃん、そんなに庇う必要はないんだよ？ほら、何されたか聞いてごらん？」

「だから、私はなにもされてない！泉は私にひどいことなんてしたことない！いつもみたいに私の薄着を注意して、呆れてたんだから！…それに…たしかに何かされたら怖いかもしれないけど、泉なら許せるもん。そのくらい好きなんだもん。お姉さん、警察官だから疑うのは仕方ないも知れないけど、泉は私にひどいことしてないもん。優しいもん。ぎゅっとしてくれたんだから」

涙声で涙と鼻水で顔を汚しながらも、必死に僕のフォローをしてくれていた。

従姉さんの疑り深さも病的ではあるにせよ、職業上仕方ない部分もあるから、いつもは従姉さんが落ち着いてから説明している。

でも、そんなことは百も承知のはずのエリーは感情のコントロールが決壊し、とにかく僕は悪くないと訴えている。

なんていうか、かなり痛々しいまでに愛されていると感じた。

「ごめんね。泉も、エリーちゃんを大切にしなきゃダメよ?」

「うん。ほら、エリー。ぼくは大丈夫だから」

「うん。……うえ…顔汚い。洗面所借りるね」

エリーは部屋を出て洗面所へと赴き、僕はひとつため息をついたあと、エリーの涙と鼻水が付着した服を脱いで、着替えた。

エリーが帰ってきてから付着したものを着ていたら怒られてしまうし。

従姉さんが口を開く。

「あのさ…さっきの、ごめんね」

「ううん。気にしないで。エリーのこと心配してたんだからさ」

「うん、まあ…ね。でも、やり過ぎたよ」

「これからおいおい直せばいいよ」

「まさかエリーちゃんがあんなにあんたにベタ惚れなんてね」

苦笑い。

けど、たしかに、今のフォローには驚くばかりだ。

そんなにまで、僕を好きなんだと嫌というほど感じたけれど、それでもやはり、エリーに好きだと言われて嬉しい僕がいる。

これは、これだけは嘘だとは…思いたくない。

そんなやり取りから、少し時間がたち、頃合いはお昼も十二時でお昼時だ。

さて、今日は母さんはぐーたらするとか言っていたから僕が作る他ないのだけれど、なかなかどうして僕は料理が苦手だ。
昔、包丁で指を傷つけて以来、怖いのだ。

「インスタントラーメンでいいかな。エリーはなにか食べたいものある？」

女の子らしく甘いもの好きで、かつ味にうるさいエリーは不思議なことにラーメンが好きだ。

ラーメンのスープが跳ねて服につくからと、普段は食べないらしいのだけれど、僕が作るさいには一緒に食べたりする。

そのときは僕のタンスから勝手にジャージを取り出して着用して、スープから衣服をガードしてたりする。

男性もので大きめのジャージを細身のエリーが着ればどうなるか、そんなことは想像しなくてもわかる通り、かなり袖や裾がぶかぶかだ。

それが大人びて見えるはずのエリーを幼く見せるので、いつもと違う彼女にどきまぎしてしまったりもする。

「なんだったら、私作るけど？」

「いや、台所は明日掃除だから散らかってるんだけど」

ちなみに油污れとかであるが。

我が家は一週間に一回、日曜日に台所のシンクやガスレンジを掃除している。

包丁やまな板は毎日使う前に消毒こそしているものの、やはり水回りは綺麗にするべきだとして、母さんが取り決め、家族で行う行事となっている。

「それは分かってるから大丈夫。材料は何があるの？」

僕は床下に設置されている収納や冷蔵庫の野菜室を覗いて伝えた。

「ニンジン、タマネギ、ジャガイモ、バター、ニンニク、豚肉、鶏肉…だね。調味料は一昨日一緒に買いにいったるし、分かるよね？」

「それ、カレーでいいじゃん」

たしかに。

何を作るなんて悩む必要もなく、カレーの材料しかないとと言える。ポークカレーかチキンカレーかは僕とエリーは真逆の好みなので少し考えるけれど。

「じゃ、チキンカレーで」

「いや、ポークカレーでしょ」

やっぱり別れた。

僕は豚肉が好きなのだけれど、彼女は鶏肉が好きなのだ。

僕は個人的に唐揚げみたいにしてあれば鶏肉は好きなのだけれども、カレーなんかにはいるとどうしても鶏肉はパサついて食べづらいのだ。

「…じゃ、今日は豚肉」

あれ？今日はあっさりといいた。

いつもなら僕がおれるのに、珍しいこともあったものだ。

心的外傷 PTSD

「ね、キスしよっか」

お昼にエリー特製のポークカレーを食べてから、二時間あまり。自室でくつろいでいると、唐突にエリーがそんなことを口にした。

「急にどうしたの？」

「え？好きな人とキスしたいのって、当たり前じゃないの？」

いや…まあ。

普通に考えるとそうなのだろうけれど。

けど、エリーの行きすぎた潔癖を考えるに、例え僕でもそういうのは無理なんじゃないのかと、思ってしまう。

自分の体液である涙や鼻水にすらも激しく嫌悪するのに、他人とキスだなんて。

ことを急ぐ気はないし、エリーだって辛いのではないのか？
それとも、髪同様に彼氏特権というものののだろうか。

「トラウマ解消できてるか、知りたいの。試すよって悪いけど…私にキスして。そしたら、私のトラウマを教えるから」

その言葉は力強く、覚悟を決めたかのような、強い意思をも感じさせた。

「ごめんね、こんなことって。泉とキスしたいのは本心。でも、

トラウマがあるかぎり、それを喜べないから」

エリーはそういうと、そつと体を寄せてきた。

エリーはこういつている。

でも、僕はどうなのだろうか。

たしかに僕も彼女とのキスはしてみたいとおもっけど。

それも、やはり。

やはり、偽物としか、嘘だとしか感じ取れないのだろうか。

「……やっぱり、こういうのは嫌よね」

エリーが少し、落ち込んだ表情を見せた瞬間に覚悟が決まった。

僕は彼女の細い肩を抱き込むとそつと、できるだけ優しくキスをした。

それから数秒。

僕はエリーの薄い唇から離れた。

「……エリー？」

エリーは涙を流していた。

そして、なにかに怯えるかのように、身を抱き、震えだす。

「だ…大丈夫。大丈夫だから。…約束、だから。話す…ね？ 泉には隠し事したくないから。…話すね」

「……うん」

僕はそつと彼女の肩をだく力を弱めた。

そうすると、エリーの震えは、少しだけ修まった。

「…………私ね、こっちにきたのはね。昔住んでた街で……塾から帰るときに、変な人に車に連れ込まれたの。それで……乱暴されたの……。怖かった。痛かった。色んな所に嫌なのが触れて、あちこちに触られて……」

……それは、つまり。

強姦されたということらしかった。

けどこれで、エリーの行きすぎた潔癖の真実が、見えた。

心的外傷。

PTSD。

トラウマ。

エリーは乱暴されたときに付着した相手の体液が未だに落ちない錯覚に陥っていて、彼女が自分の体液すらも嫌がるのはその延長。

薄着だって、トラウマを晒すことで、人から見られることで、その事実を自らには写さないようにした。

「ごめんね……。嫌だよ、こんな、すでに汚されてる体なんて。欲しくないよね。いくらお風呂で洗っても、落ちないんだよ。こんなの、泉がさわったら、汚れちゃうよ。抱き締めてくれるのは嬉しいけど……泉に付いちゃうよ……」

泣きじゃくりながら、僕に過去にあった出来事を教えてくれた。

「大丈夫だよ。エリーが汚れてるなんて、どこが汚れてるの？こんなにきれいな肌してる。僕は女じゃないから君の辛さを共有してあげられないけれど……。それでもさ、君が好きなんだ。エリーだって本当は男なんて、本当は怖くて仕方がないのに僕に告白してくれた。僕に恋してくれたんだ。だったら、君のそのトラウマが消えるまで待つから。僕は君に返事を待たせたから。今度は、僕が待っててあ

げるから。ずっと、ずっと」

それは紛れもなく僕の本心だ。

彼女の過去を知ってもなお、僕は彼女と過ごしたいと思った。

それは決して嘘でも偽物でもない、思えるたしかなものだった。

「いいの？高校、卒業するかもだよ？」

「いい」

「おばさんになっちゃうかもしれないのに？」

「構わないよ」

「おばあちゃんになっても？」

「君が大丈夫になるまで、待つから。僕が君を守るから。だから…
今度は僕から。…エリー。僕と、付き合ってくれないか」

かなりめちゃくちゃだし、格好もつかないけれど。

僕はありったけの想いをエリーに届けるために告白した。
すでに恋人である、少女に、愛の告白を。

「うん。うん。ありがとう。泉、待っててね。私、頑張るから。ち
よっとずつだけれど、私のこと、あげられるように、頑張るから…」

本当に今日のエリーは感情のコントロールが出来ない。

今だって、嬉しくて泣いているのか、怖くて泣いているのか、本当に
わからないくらいめっちゃめちゃだ。

体は震えてるし、僕の腕をつかむ力は強くて、爪が食い込んでいる。

でも、涙と鼻水でめちゃくちゃな顔はたしかに、嬉しそうに笑っているのだ。

「……泉い。大好き」

「うん。僕も。本当はね、僕、高校はいつ頃からエリーのこと…好きだったんだよ」

「……私、もつと前から」

「あはは。負けた。……僕も、ひとつ教えるよ。僕が、世界を絵本に例えだした訳を」

僕は彼女の髪の毛を手ですいてあげながら、秘密をさらしてくれた彼女に、僕のことを教えることにした。
特筆して秘密ではないけれど、けど、これも一種のトラウマなのかもしれないから。

「僕はね、昔、妹がいたんだ。僕より二つしたの、可愛い妹が」

初めてエリーに話す…というより、こんなこと、初めて人に話すのかもしれない。

世界を嘘で作られた絵本だとする僕の持論は、僕の親しい人は皆知っている。

エリーしかり、家族に友人。

でも、その持論に至る過程を、誰も知らない。

「妹はね、遥っというんだ。…よく覚えてないんだけどさ。僕と遥

はね、すごく仲が良かったらしいんだ。それこそ、何をするのも一緒って感じで。僕と遙はね、毎日、絵本を読んでたんだ」

「……絵本って、あの？」

エリーは僕の机の引き出しを指差した。

その引き出しには、妹が遺した絵本がある。

僕の宝物で、嘘の証明。

「うん。…でもね。遙は…殺されたんだって」

それは昨年聞いた、真実。

僕が大きくなり、犯人の刑が確定したから僕に伝えたそうだ。

「本当によくわからなかった。まるで絵本だなんて。遙と遊んでた記憶はあるけど…もう薄れてしまってるんだから。せめて忘れないようにあの絵本を持ってるけど、それでも。絵本からキャラクターを切り取ったみたいにな、すっぴりといなくなったんだから。そしてそこにいたキャラは嘘。新しいキャラが入って穴を埋めるけど、それも嘘。嘘だらけ。嘘で作られた世界は絵本なんだよ。だから、僕はそう考えてるんだ」

支離滅裂になったけれど、でも、うまくまとめきれないのだから、それは許してもらいたい。

「…なら、私も、嘘？私はここにいて、泉とキスしたんだよ？」

「うん。…でも、まだ、うまく実感が持てないんだ。まるで、僕がゲームで僕を動かしてるような、そんな奇妙な…」

まるで、離人症のような、そんな感覚。

「なら、私がそれを直す。怖いけど、キスはできたから。何回でもキスをして、ぎゅってして、私が嘘じゃないんだって、教えてあげるから」

それは、とても気持ちのいい言葉だった。

心のそこから僕を受け入れてくれる、そんな慈愛に満ちた瞳が、僕を見つめている。

そして今度はエリーから優しくキスをくれた。

恐怖に耐えながら、有言実行とばかりに。

そして、唇が離される。

「……ね？私も頑張るから。だから、泉も頑張ろ？」

震えながらも、笑みを浮かべて僕を見てくれた。

エリーはこんなにも強がつて、トラウマを克服しようとしているのに、僕も直さなければ、エリーといることは出来ないだろう。

「うん。これから、よろしくね。エリー」

浴衣姿と説教とやきもち

お互いの心の迷いを打ち明けてから、二ヶ月あまりが経過した。学校は終業式を迎えて夏休みに入り、今日はその初日。

この季節になると僕たちの地元は夏祭りを開催し、地域を盛り立てる。

ちなみに今日がその祭りの日で、近所…とはいっても歩いて20分くらいの場所にある神社で行われる。

ちなみにこの神社ら何を祀っているかは地元の人でも知らないから、知ってるのは神主くらい。

歴史ある神社らしくて境内も広く、住み込みで巫女さん達が数人働いているらしい。

たしかに見た目は荘厳ではあるけれど、僕とエリーにとっては祭りの開催地や初詣の場所というイメージしか湧かない。

「ジャックー」

窓を開けて本を読んでいるとエリーがやって来た。

ちなみに格好は以前だした僕の要望に沿ってタートルネックのノースリーブ。

胸元さえ見えなければ、変に意識したりはしなくてすむし、何よりそういった視線を怖がることがわかったエリーのためになるから、二人にとってもいいことだ。

理由が理由であれ、肌をさらしすぎるのはあまりいただけないのは本音だけだ。

「僕は泉だつてば」

「えへへ。夏祭り、今夜だねー」

靴下を脱いで丸めながさういって、自室へと投げ入れて僕の部屋へと入ってくる。

そしてベッドに寝転がる僕の隣に座り込んだ。

「別にお祭りなんて初めてじゃないでしょ」

「……初デート、なんだよ？」

あ、そうだった。

基本的には付き合いがたは以前から変わらないものだから、デートだとかはしたことがなかった。

それに、たまに出掛けるといっても、家族ぐるみの付き合いがほとんどの山中家と羽犬塚家は仲良く出掛けることがほとんどであり、二人きりで……というのは、まだ無かったのだ。

「……そうだね。いつもは部屋で遊ぶだけだから、たまにはデートしなきゃね」

ちなみに僕もエリーも毎年、夏祭りにはいつているのだけれど、僕もエリーもそれぞれの友達と一緒にいつているため、これまで二人でいったことはなかった。

そう考えると、なんとなしに楽しみになってきた。

「……き、今日こそは、手を繋ごうね！」

そう、まだ僕たちは手を繋いだことがないのだ。
理由はエリーの過去のこと。

けどまあ、理由はわかってるし、キスもハグもしているのだから、あまり慌てるようなことじゃなきゃけれど。順序がめちゃくちゃなカップルである。

「そんなに無理しなくてもいいよ？また泣いちゃうかもしれないんだし」

以前、手を繋ごうとトライしたときには、あまりの恐怖感をエリーが感じてしまったために、指先が触れた段階でエリーが号泣、断念することとなった。

しかし、最近のエリーも不思議なことで、泣いているときに髪をすいてやると泣き止むのだ。

「…うつん、私、泉と手を繋ぎたいの。私は泉が大好きなの。泉と付き合ってるんだって、友達に知らせたい。手も繋げないのに言っただころで信じるひとたちじゃないでしょ？」

「そうだね。特に、僕の友達なんかは」

変わり者揃いで面子も濃いものだから、相手するのに多少疲れたりする。

けどまあ、気心知れていてよく遊ぶ仲間でもあるから、信頼をおけることは保証付きだけれど。

「手を繋ぐのが無理なら、腕を組むとか！」

「ハードル上がってるよ」

「そっなんだけど、ほら。私ってハグは平気になったから、そのノリで行けるだろうし」

ともかく、僕と恋人らしいことをしたいという。

僕もいい加減、エリーについてのいちゃもんにもうんざりしていることだし、エリーは僕の彼女だと、堂々たるとして胸を張りたいところだ。

そんなことを思っていると、うつ伏せている僕の背中に、エリーが覆い被さる。

腰の位置で座り込み、中背のあたりで手を落ち着かせている。

「何してるの？」

「んー、手以外の所は平気なのになあ」

と手を肩の位置まで這わせて、肩をつかむ。

つかんでは離し、つかんでは離しを繰り返す。

ああ、なるほど。

エリーはマッサージをしてくれていたのか。

「あんまりこつてないんだね」

「まあ…運動とかしてる訳じゃないしね」

バイトはしているけれど、それは在宅のもので、パソコン操作による書類の作成、コピーの内職のようなものだ。

毎月、お小遣いはもらえるけれど、とりあえずこの先のことも含めてお金はある程度補填したいと思って先月から始めたものだ。

パソコンの操作はある程度マスターしているので、特に苦労もなくノルマを片付けていて、先月は三万円ほど稼ぐことができた。

ちなみにこれは今日の軍資金だ。

「何着ていいのかな」

エリーはそう呟いている。

容姿端麗で輝くような銀髪が麗しく流れるエリーなら浴衣なんかも似合いそうだと思う。

「…浴衣だと着替えられないしなあ…」

エリーの潔癖は以前ほど激しくはないけれど、それでもやはり体液に関しての嫌悪は健在で、僕の部屋でも汗をかくと、その場で持ち込んだ服に着替えたりする。

「エリーの好きな格好でいいよ。浴衣も見てみたけど…無理は言えないしね」

「…ごめんね。来年こそは、ちゃんと着るから」

「気にしないで。それに、エリーは綺麗だから何を着ても似合うだろうしね」

そういったとたんに、エリーの顔は赤く染まった。

僕は普通に誉めただけなのだけど、エリーには恥ずかしかったらしい。

「ゆ、浴衣も着る……。一日くらい…、汗は我慢できるもん」

「いや、無理じゃなくていいよ」

「か、可愛い私をみてもらいたいのに！」

ああ、なるほど。

けどまあ、今しがた僕もエリーの浴衣姿を見たいと思っていただけだし、目の正月にあやかれるのは、行幸というものだ。

なまじつか美人であるエリーなのだから、すごく楽しみだ。

とりあえず、言い出したらきりがないエリーのために、タオルの数枚は常備しておくことにしよう。

そして、帰りは銭湯にでも寄ってから帰ることでしょうか。

「……うーん、でも、私目立つのは嫌だもんなあ。銀髪だし、碧眼だし」

ロシア系イギリス人を祖父にもつ彼女の髪は流れんばかりの美しい銀色で、まるで星空にかした川のように。

瞳の色も深い紺碧色で、まるで空と海の境界を眺めているかのような、そんな美しさがある。

それに加えて、整った目鼻立ちとスレンダーで長く細い手足。

まるでモデルのようなのだ。

目立たないわけもない。

実際は彼女の両親ともに黒髪なのだけど、染めているということはないらしい。

父親の方の瞳は紺碧とブラウンのオッドアイだから、父親方の血が濃いのはわかるし、銀髪は覚醒遺伝というものだろう。

「悪目立ちじゃないんだし、いいんじゃないかな」

「そうなんだけど……。でも、クラスの男の子には会っただろうから、

ちょっと怖いの」

まあ、たしかに。

それなりの規模の祭りだし、クラスメイトのみならず、全校の男女が一同に会する可能性もある夏祭りだ。

当然、校内で一番とも言われる人気を誇るエリーのことだ。

必ず声をかけられるし、あれこれとしつこく絡まれることは請け合いだ。

「……………よし」

僕はひとつ考え付く。

けどまあ、打開策というよりは妥協案なのだが。

「エリー。浴衣姿は、今から…僕だけに見せてくれないかな？お祭りまでは部屋でデートしよう」

在宅デート、自室デートというものが昨今では主流であり、基本的には僕の部屋で過ごすことの多い僕たちだ。

服装を浴衣に変えるだけで気分も変わるのではないだろうか。

「…うん！デート！」

どうにも本当にデートにこだわりがあったようで、デートであるならば、在宅だろうが夏祭りだろうが変わらないらしい。つまり、形式にこだわっていたのだ。

「それじゃ、着替えてくるね！」

ソックスを穿いて、窓から出るとささっと自室に戻っていった。

ちなみに我が家の屋根は平たくて、傾斜はない。

エリーの家もそうだ。

屋根と屋根の隙間だって20センチ程度だから何かしらトジを踏まない限りは落ちないだろう。

でも、やはり思うことはひとつ。

「玄関使つてよ……」

その一言に尽きるものだ。

エリーが着替えに戻ってから数十分。

恐らくは慣れない浴衣の着付けに手間取っているのだろう。

ただでさえ慣れなければ難しいのだから、仕方ないのだけど。

とくに女性の浴衣にはおはしりもあるし、帯だってあるから、気付けは難しさと面倒さが両番でやってくる。

かくいう僕はすでに愛用の浴衣。

普段あまり着ることはないけれど、一度覚えた着付けはなかなか忘れることはなく、とりあえずエリーに合わせてみたのだ。

ピンポン。

チャイムがなった。

恐らくはエリーが着替えたのだろう。

さすがに浴衣のまま屋根を歩くわけにはいかないの、おとなしく玄関から来たのだろう。

毎回玄関から来てくれないだろうか。

階段を降り、玄関まで歩いてから念のために覗き窓から外を見ると、やはりエリーだった。

僕は玄関を開け放つとエリーを招き入れる。

「あ、あの…どう？変じゃない？」

そう言つて玄関口でくるりと一回転。

髪は後ろでアップにまとめられて星の髪飾りを刺していて、後れ毛が眩しいうなじ美人に。

浴衣は黒地に赤と黄色の金魚の模様が優雅に映えて、帯は浴衣の模様を殺さないように無地の山吹色。

そしてそこには紺の帯留めにエリーの瞳と同じく紺碧の蜻蛉玉が眩しく輝いていた。

「……………」

思わず見とれてしまった。

いつも見慣れているエリーが、別人に写ったから。

照れながら僕に余すことなく浴衣姿を見せてくれるエリーはとても美しく、僕はただ頷くしかできなかった。

「と、とりあえず上がりなよ」

そう言つて僕は彼女を先に部屋へと通して、飲み物を用意するためにキッチンへとむかった。

ダイニングには従姉さんがいて、今の僕の反応について見ていたのか、笑っていた。

「あんだ、エリーちゃんに見とれすぎ」

と、ケラケラ笑っていた。

「ほつといてよ。本当に可愛かったんだから」

「まあー、あれは彼氏の欲目抜いても可愛いよね。精々、お祭り楽しみなさいな。私は痴漢をしょっぱくだけだし」

従姉さんのいる性犯罪捜査の部門は今回の夏祭りでは痴漢やスリなどを防止するために配置されるらしい。

そして神主や主任達との事前の会議が終わったので、昼休みを利用してくつろぎに来ているのだ。

ちなみに格好は私服警官なので私服。

Tシャツにジャケット、ジーンズという動きやすそうな出で立ちだ。

「そうするよ。従姉さんも、頑張つてね」

「何もないなら頑張らなくていいの。性犯罪はね

、今日起こらなくても、明日起こるかもしれないし、明日じゃなくても明後日かもしれないんだから。こればかりは犯罪全体の話だけだね」

身に積まされそうな話ではあるな。

先日聞いた、エリーの過去だつて。

もしかすればエリーが性犯罪の被害者にならなくても、だ。

他の誰かが、あるいはエリーが別の日に被害を受けたってことも、あるから。

従姉さんはもう何年もそういう事案に携わり、そう言ったことをした人達を相手取ってきた。

だから、気楽ではいるけど、気は抜かないというスタンスでいるのだ。

それに…、エリーが僕以外に過去を話した、唯一の人だ。

だからこそ、僕にはこうして釘を指すように申すのだろう。

だからこそ、身に積まされそうなのだ。

「確かに、性犯罪…特に痴漢は冤罪だってあるけどね。女性の証言のみで片がつくことだってある。私もそれは気に入らないもの。けど、強姦とかは違う。あれはDNAが出るもの。でも、捕まえても、それでも、刑務所から出たら…また繰り返す人も多い。私はそれが悔しくて仕方がないのよ。あんたがエリーちゃんを大切にしているのは知ってる。でも…もし何かあれば、私はあんたでも許さないからね」

二つの観点からものをのべる。

それはある種の達観ともとれる言葉。

従姉さんは僕がエリーを大切に出来るかを、試しているのだ。

性犯罪には痴漢や強姦はおろか、家族間の性的暴行に、カップル間の性的暴行すらもカテゴライズされるから。

「はあ…疲れてんのかしら。あんたにこんなこと言うなんてね」

苦笑いを浮かべ、ほとほとあきれたようにため息をついた。

近年は特に性犯罪が多いと聞くし、学校でもその手の指導が行われるに至るほどに劣悪だそうだ。

そのぶん、従姉さんたちの負担は増えるのだから、こうして説教を垂れるのも仕方のないことなのだろう。

「僕たちは大丈夫だよ。もし何かあれば…そのときは遠慮しないでエリーの味方になってあげて」

僕はジュースとお菓子を盆にのせて、キッチンをあとにした。

部屋へと戻ると、ベッドに腰かけているエリーが、僕の隠してあった思春期の聖書を手にして、涼しげな顔で、というか、侮蔑の入り交じった表情で眺めていた。

「あ、あの…エリー…？」

「ジャック？」

怒気の入り交じった声に、思わず身がすくんでしまう。

あんなに怒るエリーは初めてだ。

いかにもな不機嫌といった具合に頬を膨らませ、目尻には涙。

「ごめんね、私胸ないもんね。やっぱり男の子って巨乳がいいんでしょう？」

「あ……いや、その。偶々だよ、偶然」

確かにエリーはスレンダーなぶん、バストなんかは控えめだ。

でも、人それぞれにバランスがあるのだから気にしなくても……
って、今は何をいつても言い訳にしかない。

「泉がこういう本を持つてるのはいいよ。男の子だし、私は無理なんだから。あー、もう！なんで私はエッチな本にやきもちやいてるのよー！！」

と叫んで本をゴミ箱へと投げ入れた。

ちなみに僕のすむ町では本は古紙回収でしか捨てられないので、ゴミ箱へは捨てられないのだが。

「後学のため…って読んでみたけど。ねえ、泉はやっぱりおっきい方がいいの？」

「……そうでもないけど。とりあえず、恥ずかしいからこの話題は止めようよ」

僕はテーブルに盆を置いて、熱くなった顔を隠すためにベッドへと身を投げてうつ伏せた。

夏祭りと恋路と友達と

従姉さんと話して、絶対にエリーを大切にすると誓って、エリーに思春期の聖書を発見されて大泣きされてから、数時間。

しばらくは不機嫌ながらも甘えに甘えたエリーは一度帰宅してシャワーと着替えを済ませてから、僕たちは神社の祭りへと向かった。

今は自宅と神社を結ぶ道程の中程で、町から巣講師離れた場所にある農道のような道。

周りは田畑がならんでいて、僕たちの家のように田畑のなかに住宅がちらほらと見える。

その中でのひとつの家に、僕たちは立ち寄ると、インターホンをならした。

少ししてから反応があり、玄関扉が開け放たれ、僕たちと変わらない年頃の少年と少女が出てきた。

「おつす。急に誘いかけて悪いな」

「気にしないで。僕たちもお祭りには行くつもりだったから」

僕より少しだけ背の高い彼は、僕のクラスメイトであり、気心の知れた友人の一人でもある、桜井昌樹。

サッカー部に所属していて、次期主将といわれるくらいのプレイヤー。

「エリー、あの話、本当なの？」

と、エリーに話しかけたのは昌樹の双子の姉であり、僕とエリーの

友人の桜井小春さん。

女子テニス部の部長を勤めていて、高校レベルではトップクラスの実力者らしい。

高校に入学したての頃はエリーをテニス部に誘っていたのだけれど、汗をかくことを極端に嫌がるエリーの意味を尊重して、それ以降は勧誘しなくなった。

「…うん」

エリーは頷くと、そつと僕の方へと距離をつめて、腕を組むように抱きついた。

たしかに、ハグができるのだから、その勢いでなら腕を組むなんてこと、造作もないようだ。

「あんたたち、やっとくつついたのね。残念だったわね、昌樹。エリーは山中のものになっちゃったわよ」

「んなもん、最初にふられたときに諦めてるよ。羽犬塚、良かったな」

「うん、ありがと」

「それじゃあ、行きましょ。早くいかないと、人がごった返すし」

小春さんがいった通り、早めにいつて拠点的な場所を確保しなければ、あまたに及ぶ人が群れをなすために、集団では行動しづらくなる。

ちなみに去年までの拠点は、境内にある大きな銀杏の木。

そこを拠点にして、一人二人が食べ物やら飲み物やらを調達してくるといったことをしていたので、今年もそうすることにした。

「いや、でもまさか泉が羽犬塚と付き合うなんてな。お前、二ヶ月くらい前までは羽犬塚は苦手だとか言ってたか？」

「エリーは美人だからね。校内でも人気あるし、家が隣だから。理不尽な理由で恨まれたことあるからさ、それでそういうことにしておいたんだよ。でも、エリーのことはずっと好きだったんだよ」

「なんともお前らしいというか。サッカー部の野郎共にはオレから言っというてやるよ。バカ抜かしてねえで練習しろってな」

「ありがとう。でも、昌樹はエリーのこと、好きだったんだね」

先程聞いたときは少しだけショックだった。

でも、ひとの、それも友人の恋路に口を挟めるような人間でもないし、エリーを恋慕う男子は僕を含めても多いのだから。

それはまあ、仕方ないことだ。

「ふられたときに、羽犬塚がお前のことが好きだって言っのに気づいてな。それから応援してたんだ。やっぱ好きな子には楽しそうに笑っててもらいてえじゃんよ？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7514y/>

嘘つき世界と二人と絵本

2011年11月23日14時56分発行